

若者のファッションから見えてくるもの ——“三厚娘”の社会生態学——

市川孝一

An Essay on Fashion and Mentality of Young Japanese Girls

Koichi Ichikawa

はじめに

前号で『生活科学研究』としては初めての試みとして、「生活時評」というセクションを設けてみた。その時々で話題となっている広い意味の生活領域の諸現象を取り上げ、評論風に論じてみようという企画であった。

第一弾として、拙文「現代若者考：『視線平気症とケータイ文化』」を掲載したところ、それなりの反響があった。そこで扱っていた問題に関して、いくつかの取材も受けることになった。主に最近の若者の行動特性とメンタリティの特異性について日頃感じていることを述べたわけだが、同じように感じている人は多かったようで、若者の変貌ぶりについての嘆きは共感を持って受け入れられた。

すっかりそれに意を強くして、ここではその第二弾をお送りしたいと思う。今回は若者のファッション、特に若い女性たちのファッションと生態について若干のコメントを加えてみたい。具体的には、「車内での化粧」「厚底ブーム」「〈ガングロ・ヤマンバ〉ファッション」の三つのテーマを取り上げる。この三つに注目したのは、偶然読んだひとつのコラムがきっかけになっている。放送評論家の島野功緒氏が、ある週刊誌の連載コラムの中で、最近の若い女性に顕著な現象に「三厚」という呼び名を与えていた。いわく、「厚化粧」「厚底」「厚かましい」というわけだ（『週刊新潮』1999年12月23日号）。

ひところはやった「三高」（高収入・高学歴・高身長）をもじったものだが、なかなか、素晴らしいネーミングだと感心した。確かに、最近の若い女性の特徴が見事にこの三つの言葉には集約されている。しかも、三つとも筆者自身も常々気になり、気に障っていたものばかりである。「これはわたしもぜひひとこと言っておかねば…」と思ったのは当然の成り行きである。というわけで、これらの問題に関して日頃感じていることを述べてみたいが、どうしても事の性格上、若者の行動に対する嘆き、ほやきが中心ととなることは今回もまた避けられないだろう。

車内での化粧

まず、順序は逆になるが、「厚かましい」を「厚顔無恥」と言い換えて、車内での化粧の問題を取り上げる。前号で中心的なテーマとした「視線平気症」の議論のなかでも言及したが、若者たちの「傍若無人」な振る舞い＝「視線平気症」の代表的な症状のひとつが、まさにこの若い女性たちの電車内での化粧行動である。この問題については、マスコミでもよく取り上げられるし、実際われわれも事例に遭遇することが少なくない。ポーラ文化研究所が1999年5月に首都圏と札幌の女子大生305人を対象に行った調査でも、約5人に1人が“電車内で化粧をしたことがある”と答えている（『読売新聞』1999.12.30）。文化女子短大の170名対象のアンケートでは、なんと40%が「経験あり」と答えている（『週刊朝日』2000年1月21日号）。

長い乗車時間の時などは、基礎工事から完成までの全プロセスをしっかりと見せられることになる。周囲の人間は、思いきり「軽蔑」や「非難」の視線を浴びせているのだが、当人はそんなことにはお構いなしである。そんな視線などはじめから気にならないのが、「視線平気症」の「視線平気症」たる所以である。しかも、車内の化粧行動はますますその「傍若無人」ぶりをエスカレートさせているようである。作家の林真理子さんが、週刊誌の連載コラムで「電車の中でタマゲル光景に出会った」と興奮を隠せぬ口調で報告している事例では、なんと若い女性が小さな手鏡片手に一生懸命鼻毛を切っていたというのである（「今夜も思い出し笑い」『週刊文春』2000年2月3日号）。ちなみに、車内で化粧をしている女性を見ていると、面白い法則として“それだけの努力に見合った成果を期待できない”というタイプの女性が多いのが一般的だが、この「鼻毛手入れ女性」は「そこそこ可愛い普通の女性」だったようだ。

幸い筆者自身はまだ経験したことはないが、大学の授業中にも化粧をする女子学生がいるらしい。短大で教えている知人の話だが、授業中に一番前の席で堂々と化粧をしている女子学生がいたという。さすがに頭に来て、マスカラを一生懸命塗っている彼女に注意をしたという。ところが、その女子学生は自分がなぜおこられるのかわからないという反応で、逆にその教師に食って掛かったという。

「なんで、いけないんですか？ 私は誰にも迷惑はかけていません！ それに先生の話はちゃんと聞いていますから！」と猛烈に反論したというのである。その先生は、「授業をしている私が不愉快だからやめてくれ」と言ってやめさせたそうだが、その学生は納得がいかないような顔をしていたという。

これらの事例から何がわかるだろうか。「視線平気症」は一般的には〈恥の意識〉の欠落、〈恥の感覚〉の喪失として語られることが多い。それはまさにその通りなのだが、周囲の学生たちの意見などを聞いてみると、「欠落」「喪失」というよりも、〈恥の意識〉や〈恥の感覚〉の変容と言った方がより正確なようである。つまり、「何を恥ずかしいと感じるか」の基準が、先行する世代と今日の若者たちでは異なっているようなのだ。

「人前で化粧をする」「公衆の面前で化粧をする」ことは、なぜ恥ずかしいことなのか。ある世代以上の女性だったら、「それは他人の目からは秘すべき、きわめてプライベートな行為だからである」と答えるだろう。やや大げさに言えば、排泄や性行為を他人の目にさらさないのと同じ事である。あるいは、化粧をしたり身支度を整えたりすることは、あくまでも「舞台裏」ですべきことである。「舞台裏」とは隠すべき領域であり、「舞台裏」を覗かれることは恥ずかしいことなのである。このように生活の領域の「表」と「裏」を峻別し、使い分ける感覚が従来はあった。

ところが、今の若い女性たちにはこうした感覚は全くない。だから、公衆の面前で化粧をすることがなぜ恥ずかしいことなのかがわからないのである。彼女たちは言う。電車の乗客のような知らない人たちにいくら化粧をしている姿を見られても恥ずかしくない。それよりも、化粧をしないでデートに出かけ、すっぴんを彼氏に見られることの方が恥ずかしい。だから、時間がなければ電車の中で化粧するのは当たり前で、むしろ移動時間を有効に使う合理的な行動だということになる。前出のポーラ文化研究所の調査でも、電車内で化粧をする理由で最も多かったのは、「時間が無い」(72%) だったそうである。

ここに見られる「私的な空間」と「公的な空間」を使い分ける感覚の消滅は、同じく前号の拙文で扱った「ケータイ文化」の問題とも深く関わっているような気がする。たとえば、ウォークマンのようなケータイ・メディアは、本来は部屋の中でしかできなかった「音楽を聴く」という行動をそれ以外の場所でも可能にした。携帯電話もそうである。そこでも述べたように、“いつでも、どこでも、私と一緒に”というのが、ケータイ・ツールの本質だからである。

しかし、「私的な空間」が「公的な空間」に入り込んでくると、摩擦が生じる。「私的な空間」による「公的な空間」の侵食は、それまでの両者の使い分けの世界に確立していた暗黙のルールに対する侵犯となる。既存のその種の規範になじんでいる人間にとっては、そのことは非常に不快で不愉快な出来事となる。携帯電話の「用件電話」ではない、たわいのない個人的な「お喋り電話」がとりわけ不評なのはこのためである。ケータイ・ツールの隆盛に象徴される「便利な生活」は、限りなくこの「私的空間」が肥大していくことを意味している。

あるいは、さらにもっと一般的に言えば、「TPO」に関する規範のずれが、世代間でますます広がってしまっているということである。時間・場所・状況に関する規範コードに、大きなギャップが生じてしまっているのである。以前だったら広く大多数の人に共有され、了解が成立していた「場所柄をわきまえた行動」というものを、若者に期待することが困難になってきているのである。旧人類は、ますます不快な思いをさせられることになりそうである。

厚底ブーム

二つ目の「厚底」は、そのまま厚底ファッション・厚底ブームに対応している。次にこの問題を検討してみよう。底の厚い履物のブームは今までもなかったわけではない。しかし、1990年代の後半からの10代、20代の女性の間で流行となった厚底ブームは、底の部分の厚さが半端ではない。厚底サンダル、厚底ブーツの中には、20センチ前後のものまでであるという。

これらは、見るからに不自然な履物である。歩きにくく、転倒しやすく、捻挫や骨折の原因となる危険な履物でもある。国民生活センターの集計によると、1994年度から98年度の間に届け出のあった女性靴に関する事故203件のうち、厚底靴による事故は80件で、39%に達するという。件数も、94年度には7件だったものが、98年度には21件と急増している（『厚底ブーム衰えず』『東京新聞』1999.9.12）。

接骨医や外科医たちも、厚底靴の危険性については警鐘を鳴らしている。転倒による怪我、捻挫・骨折はもとより、無理な歩行から来る膝への負担、足の変形さらには腰痛の原因にもなるというのである（「くじけぬ女心——厚底サンダル」『読売新聞』1999.7.10）。

それどころか、厚底靴は命すら奪いかねない。1999年9月には神奈川県伊勢原市で25歳の女性が、厚底サンダルを履いていて転倒。これが原因とみられる左頭部骨折で死亡するという事故まで起きている。また、同年11月には、茨城県ひたちなか市で、厚底靴を履いた女性の運転す

る軽乗用車が標識のコンクリート柱に衝突、同乗者が死亡する事故も起きた。靴が引っかかってうまくブレーキが踏めなかったというのである。

車の運転に厚底靴が危険なことは実験でも確認されている。交通事故総合分析センターと日本損害保険協会が共同で行った実験では、次のことが明らかになった。——厚底靴を履いて車を運転すると、運動靴に比べて危険を察知してブレーキを踏み出すまでの時間が0.05秒遅くなる。また、障害物出現から車が停止するまでの走行距離の平均値は、厚底靴と運動靴では1.1m以上差があった（「厚底靴で運転しないで!!」『読売新聞』1999.12.7）。この場合の1.1mという数字がいかに大きなものであるかは言うまでもないだろう。自分の命を落とすのも大変なことだが、人の命を奪うとなると事はいっそう重大である。大阪府警はこの厚底靴の危険性を重く見て、本格的な規制を検討し、取り締まりの対象とする方針を打ち出した（『読売新聞』2000.2.4）。

これほど危険な厚底靴を若い女性たちはなぜ履くのか。彼女たちの言い分はこうだ。——「脚が長く見えてかっこいい」「一度厚底靴を履くと眺めが良くてやめられない」。日本の若い女性たちの間で流行の厚底ブームを紹介した『ニューヨーク・タイムズ』紙の記事の中でも、「厚底を履くと通勤電車の中で、傲慢にしている中年男性たちより私の視線が高くなる」と、“男を見下ろせることの爽快さ”を語る女性の証言を皮肉っぽく紹介しているという（「日本の“厚底”米紙が紹介」『日本経済新聞』1999.11.27）。

身長が違くと、見える風景が変わってくること、身長の違いが生む微妙な力関係の変化については理解できる点がなくはない。しかし、それらのメリットやプラスの面を考慮しても、払わなければならない犠牲の大きさは、果たしてそれらに見合っているだろうか。厚底靴はコストやリスクがあまりにも大きすぎるファッションと言わざるを得ないのである。

そして、この厚底ブームはファッションや流行の本質に関する議論を想起させる。流行を成立させる要因、流行を規定する要因はつきつめていくと「合理性」と「芸術性」だというのが「定説」である。流行は、〈生活の合理化〉と〈生活の芸術化〉との接点に成立する。われわれの日常生活の衣食住に関する流行は、一方でより能率的で健康な生活を目指す生活の合理化の動きを原動力として同時に、他方で人々の美的な欲求を満足させることが必要であるということである。ファッション（服飾の流行）は、単に着心地が良いとか安価で丈夫だといった実用性や機能性だけではダメなのである。「美的なセンス」とか「カッコ良さ」という「芸術性」が加わらなければ成り立たないのである。

個々の流行は、この二つの要素の攻めぎ合いの中で生まれてくるものだが、「合理性」は「芸術性」の行き過ぎに対して歯止め役となるのが一般的である。デザイン的にどんなに斬新で素晴らしいとしても、燃費が悪すぎれば車としては成り立たない。ファッション（服飾の流行）でも、それを身につける人間にとって快適なものでなければ成り立たない。少なくとも、人間の身体に苦痛を与えたり肉体の機能を損なうようなものは排除されるはずである。歯止めというのは、そういう意味である。

そういった観点から厚底靴を見た時、これは明かにその「合理性」の限界を超えている。カッコ良さを追求するあまり、人間の側の快適さを犠牲にしているからである。この流行の採用者たちは、危険性を重々承知している。若い女性たちは、歩行の不自由さや転倒による怪我や骨折のリスクを覚悟の上で、「美」を追求しているのである。これは「非合理的な」情熱以外の何物でもない。

もちろんこうした事例が今までにもなかったわけではない。前世紀までの欧米の女性たちの間

で愛用されていた良く知られたファッションに、コルセットというものがあつた。からだの線を細く見せるための強力な補整下着である。有名な映画「風と共に去りぬ」にも、主人公のスカールレット・オハラが黒人の召使の女性に手助けしてもらい、ウエストを思いきり締め上げる印象的なシーンが出てくる。ウエストから胸にかけて不自然に締め付けるコルセットが身体に良いはずがなく、多くの女性が健康を害した。この時代の女性たちが短命だった大きな原因の一つが、このコルセットというファッションにあつたと言われるほどである。この例に見られるように、女性は時には生命を犠牲にしてまで「美」を追求することがあるのである。しかし、この場合の「美」は男性側から期待された「女性美」であつて、女性たちは力関係によってそれを強制される立場にあつた。この点を頭に入れておかなければならない。

また、厚底靴は現代の「纏足」だという説もある。纏足とは言うまでもなく、かつての中国に見られた奇習で、布を堅く巻きつけて女性の足が一定以上成長しないようにしてしまうものである。人工的に歩行が困難な状態を作り出し、そうした女性に官能的美を感じそれを寵愛の対象にするという男性の屈折した美意識が反映されたものだと言われてきた。纏足はまさに男性側から女性に強制された「女性美」の最たるものである。

しかし、今現在は21世紀を目前にした時代である。何が身体に有害で、健康を害するものであるかは科学的・医学的常識によって、誰もが容易に知ることができる。男が一方向的に勝手に作り上げた「女性美」をあからさまに強制されることもない。にもかかわらず、日本の若い女性たちは自ら選んで、健康をそこね、危険が一杯の「現代版纏足」を喜んで身につけているのである。そこが不思議なところである。

ぜひ当事者たちの意見も聞いてみたいものだ。実際に彼女たちはどう言うかわからないが、ひとつだけこうしたファッションの流行に対して納得のいく説明が可能である。次のように考えれば、厚底ブームも理解できなくはない。それはこういうことだ。——彼女たちは、実は健康なんてどうでもいいと思っているのではないか。生命なんてどうでもいいと思っているのではないか。親の世代が何にもまして大切なものと思ひ、無条件に肯定してきた価値を彼女たちは放棄してしまっているのではないか。

確かに話は飛躍し過ぎである。しかし、こう考えると納得がいくのである。もちろん彼女たちはそれを明確に自覚した上でやっているわけではないだろうが、厚底ファッションからは彼女たちの投げやりで絶望的な心理が透けて見えるのである。厚底ファッションは、そうした彼女たちの「無意識の自傷行為」とでも言うべきファッションなのである。何とも救いのない結論だが、厚底ブームとは、そういった底無しの彼女たちのデスペレートな心情を反映した、究極の世紀末ファッションなのである。

「ガングロ・ヤマンバ」ファッション

三つ目の「厚化粧」の最新版が、いうまでもなくどぎついメーキャップを特徴とする「ガングロ・ヤマンバ」ファッションである。ひところのツッパリ系の若い女性のファッションは、「ガングロ・茶髪」であつたが、最近はちょっと違ってきている。髪は金髪というより銀髪。白いまぶたに白い唇。長い銀髪はまるで振り乱した白髪のように、「ヤマンバ(山姥)」という命名はもちろんここに由来する。外見はまさに妖怪と見まがうばかりの不気味なメーキャップである。夜道で白系のコートに身を包んだこの手のファッションの女性が、角からいきなり出てきた時には思わず大の男のこちらが驚きの声をあげそうになった。

「ガングロ・ヤマンバ」ファッションには当然批判も多い。『毎日新聞』の日曜日の地方版には、毎回テーマを決めて読者から賛否の意見を募るユニークな投書欄がある。そこでも、このファッションが取り上げられている（「輪つSAY——『ガングロ』『ヤマンバ』」『毎日新聞』2000.1.30）。この記事などを参考にしながら話を進めていきたい。

代表的な批判的意見の論点には次のようなものがある。ひとつは、“自然が一番”“素顔が一番”というものである。“女子高生くらいの年代では何もお化粧などしなくても、若さで十分。そのままでも、素肌が一番きれいな時。それなのに、どうしてわざわざマイナスになるようなことをするの！”という類いの指摘である。この種の意見は、年配の女性の投書に典型的に見られるものである。そこには、“恵まれた状態にあるのになぜその素晴らしさがわからないの”という歯がゆさも色濃くにじみ出ている。——そう、確かに若さはそれだけで美しい。若さゆえの美しさは、生物学的な厳然たる事実なのである。ところが、当事者は愚かしくもそのありがたさに気がつかない。

もうひとつは、「ガングロ・ヤマンバ」も〈流行り〉に乗っているに過ぎないという指摘である。一見、強烈な自己主張のように見えるが、単にまわりのみんながやっているからという理由で同調しているだけだという批判である。ルーズソックスなどの流行と同じで、そこには個性も主体性も感じられない、ただの物まねだというわけである。“流行りもの”ゆえにくだらなという意見である。なかには、“焼きすぎた肌は将来皮膚ガンになるかもしれない”と医学的な観点から懸念を表明する意見もある。

一方肯定的な意見のひとつは、これもしょせん流行りのファッションであり、夢中になるのも若さゆえのことであり、一過性の現象であるという見方である。若者は、いつの時代にも奇抜なファッションで大人たちの輦轡を買うものだが、やがて時期がくれば自らそういうものから離れていくものであるというクールな見方である。これは前出の意見とは逆で、“流行りもの”だからいいじゃないかという意見である。どうせ一時的な現象なのだから、いちいち目くら立てる必要はないというものである。

また、この投書欄の担当記者はヤマンバ・ファッションの女子高生たち取材した経験から、積極的な擁護論を展開している。彼女たちはその外見に似合わず、意外にしっかりしている。たとえば「福祉に興味があり、介護の仕事がしたい」などというように将来の夢などもはっきりしていると、その「実像」を紹介した上で、彼女たちに共通しているのは“異性の目を気にしない”点で、「男に媚びない、その潔い開き直りに、どこかすがすがしささえ覚える」とまで褒め称える。ベースにあるのは、“人を外見で判断しては行けませんよ！”というおなじみのお説教である。

さらに、「…肌の白さは容貌の美醜を際立たせる効果がある。ガングロには、女性の美醜を従来の価値観で判断されたくないという気分があるかもしれない。そこを評価したい」というポーラ文化研究所の村沢博人首席研究員のコメントも紹介し、自説を補強する。“色の白いは七難隠す”という言葉があるように、日本では肌の白さは女性の美の基準であった。化粧もそれを目指して行われてきたが、ガングロ・ファッションの女性たちはその価値観を打ち破って顔を焼き、黒く塗って異性をはねかえしている。——そこが痛快だというのである。

しかし、このガングロ・ファッションは全く別の視点からも見ることができる。ロンドン在住のジャーナリスト多賀幹子氏は、久しぶりに帰国した日本で、厚底娘たちのファッションに出くわし、とりわけガングロ・ファッションにショックを受けた経験について書いている（「多賀幹子のロンドン発 ガングロと人種問題」『東京新聞』2000.1.21）。

まず、肌の色というものは非常に複雑で微妙な問題を含んだものであるということ。肌の色というのは、まさに民族的・人種的アイデンティティそのものだとすることを指摘した上で、ロンドンやニューヨークだったら「流行しているから」といって、肌を黒く塗ることなど到底考えられないというのである。「もしそんなことをしたら、たちまち差別の歴史や民族の誇りへの鈍感さに侮蔑の視線を浴びることになる」だろうというわけである。

ガングロが無邪気なファッションとして通用するのは、日本のような「特殊な社会」だけだということを多賀氏は言いたいのである。他の社会でこんなことをしたらそれは直ちに“民族の誇りを傷つける行為”として非難されることになるだろうと言うのである。危険な厚底ブーツや肌をいためる化粧品に使うお金があるなら海外に出かけ、日本人の「常識」が世界の「非常識」であることを身をもって経験してほしいと彼女たちに呼びかけ、辛口のコメントを締めくくっている。

ガングロ・ファッションの当事者の彼女たちにはおそらく全く思いもよらない視点であろう。そんな発想は全く出てこないだろう。そして、その種の無神経さは残念ながら多くの日本人に共通のものである。こんな例を思い出す。1980年代にシャネルズという男性歌手グループがいた。「ランナウエイ」などのヒットを飛ばし、それなりの人気を獲得した。彼らは、靴墨で顔を真っ黒に塗り、黒人風のメーキャップをトレードマークにしていた。筆者は個人的にはこのメークが大嫌いだった。少なからぬ人たちが、彼らのそのいでたちに違和感となんとも言えぬ不快感を感じていただろう。しかし、多くの人はそれを容認し、彼らはテレビにも堂々と出演していた。あの時に感じた直感的な不快感は、実はきわめて重要で本質に関わるものだったのである。ガングロ・ファッションの彼女たちに、そして多くの日本人に必要なのは少しばかりの「想像力」だということになる。

もうひとつは、身体感覚という視点である。「ガングロ・ヤマンバ」ファッションには若い女性たちの身体感覚の変化が読み取れるのではないかということである。素人の若い男女をモデルに、彼らの生活の場である自室でヌードを撮るといふ面白い試みをしている編集者の都築響一氏が、興味深い指摘をしている（「カーブミラー2000 “へや・ヌード”の若者」『読売新聞』2000.2.4）。

意外だったのは、彼ら彼女らが裸になることよりも、散らかった自室を公開することの方が恥ずかしいという反応を示したことだという。肉体ではなく、モノの集合たとえば、床に積まれた雑誌や食べ散らかしたスナック菓子の袋などの方に、「裸の自分」を見られて恥ずかしいという感覚を抱くというのである。しかも、すごくおとなしくて地味そうなのに、乳首にピアスをしている子など、見かけと中身がまるで一致しない子をたくさん見てきた都築氏は、次のような結論に達する。——今の若者たちは、「自分の身体が、そんなに大事なものではなくなっているのかもしれない」ということである。皮膚を焦げるほど黒く焼いたり、ピアスやタトゥーで身体を飾り立てるのは、「実は自分の肉体にリアリティが感じられなくなっている徴」なのではないかというのである。

実際、今の若者たちとりわけ若い女性たちは驚くほど、自分の身体を加工することに抵抗がない。そして、その行きつくところは、もちろん美容整形による身体改造である。最近の若い女性タレントでは、むしろ整形してない方が少数派とっていいくらい整形をしているケースが目立つ。その波が、女子アナにまで及んでいる現状は大いに嘆かわしい。せっかくの自然な魅力が台無しになってしまった事例ばかり見せられるので、他人事ながら彼女たちの愚挙には腹が立つ。それはともかく、一般の女性たちにもそれらを支持する裾野が広がっているであろう事は容易に

想像できる。“親からもらった身体に傷をつけるなんてとんでもない”というような感覚は全く過去のものになってしまっている。再度都築氏のことばを借りると、今の若い子達は自分の身体を「ちょっと分厚い普段着程度にしか感じていない」のではないかということになるのである。

おわりに

以上のように見てくると、“たかがファッションされどファッション”であることがよくわかる。若者のファッションを通して見えてくるものは少なくない。ひとつは、若者たちのアイデンティティの揺らぎである。多賀氏は、民族的・人種的アイデンティティに対する驚くべき鈍感さを鋭く指摘したが、井尻千男氏はイデオロギー的には異なった立場からではあるが、「ガングロ・ヤマンバ」ファッションを日本人としてのアイデンティティの喪失の象徴として論じている（『世間漫録 少女たちのカリスマ幻想』『週刊新潮』1999年9月30日号）。

保守の論客特有の単純明快さで、彼女たちのファッションを「国籍離脱願望」の象徴だとぼさ切り捨てる。そこには、「日本人として生を受けたことに対する憎悪」が隠されているというのである。もちろん彼女たち自身がそれを自覚しているわけではない。彼女たちは、「日本人に生を受けたこと自体を無意識の領域で憎悪している」のである。彼女たちのファッションのポイントである茶髪・金髪・銀髪、ガングロ、厚底は、「髪の毛の色も目の色も肌の色も、体型にいたるまでみな気に入らない、みな変えてしまいたいという自己嫌悪を隠しもつ変身願望」だということになる。要するに、彼女たちは日本人であることを否定したがっているというのである。こんな、彼女たちを生み出したのは、伝統的な価値観や善悪美醜の基準を放棄してしまった戦後の日本社会であり、戦後教育にどっぷり漬かってきたバカな親たちだと井尻氏は言いたいわけである。このあたりの戦後批判はおなじみのもので、井尻氏の主張の中身に全面的に賛同するわけではないが、ファッションがアイデンティティに深く関わるものであるという点は再確認しておいて良い。

また、「ガングロ・ヤマンバ」ファッションには若者たちの身体感覚のありようが見事に反映されているということである。都築氏の指摘にもあったように、身体のリアリティを実感することができず、身体や生命に対する驚くべき無頓着さ、そこにうかがえる深い絶望感。そこには、彼女たちの漠然とした不安心理も反映されている。「ガングロ・ヤマンバ」ファッションという世紀末ファッションを通して、ファッションが「時代の鏡」であることを改めてしみじみ感じさせられるのである。

参考文献

- 市川孝一『流行の社会心理史』学陽書房、1993
井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『岩波講座 現代社会学21 デザイン・モード・ファッション』岩波書店、1996
柏木 博『ファッションの20世紀 都市・消費・性』日本放送出版協会、1998
北山晴一『衣服は肉体になにを与えたか』朝日新聞社、1999
鷺田清一『ひとはなぜ服を着るのか』日本放送出版協会、1998
鷺田清一『ファッションという装置』河合文化教育研究所、1998
鷺田清一『悲鳴をあげる身体』PHP研究所、1998